

奈良時代における 法華經書写についての一考察

岩 田 智 孝

一、はじめに

一切經書写について、『日本書紀』天武天皇二年(六七二)の条に、
是月聚書生。始写一切經於川原寺。

とあり、これが我国の正史にあらわれる最初の写經の記事である。一切經読誦について述べるならば、その記録はさ
らに古く、孝徳天皇白雉二年(六五一)であり、『日本書紀』には次のように記されている。

冬十二月晦。於味經宮、請三千一百餘僧尼。使讀一切經。

ともあれ我国の写經は、一切經を写すということにより始まったといえる。そして、我国の写經史上最もはなやか
なる奈良時代を迎えることになるのである。

では、奈良時代とはどのような時代であったのか。政治的にみるならば、奈良時代は律令国家時代であり、宗教的
にみるならば、国家仏教全盛の時代であった。

国分寺が造営され、それにより全国の寺院は、国家の統制下におかれるようになった。このような仏教界の動きは、

奈良時代における法華經書写についての一考察

写經の上にも反映し、写經も組織化・統制下されて行なわれるようになっていった。

先に述べたように、奈良時代は仏教の時代であり、都の置かれた南都では、国家公認の仏教としての華嚴・法相・俱舍・成実・三論・律という六宗が繁栄をきわめていた。国家仏教たる南都六宗最盛の時代に、私達の信仰する法華經は、諸經典の中で、いかなる地位にあったのか、写經の歴史を通じて、奈良時代の法華經信仰の一面をさぐってみたい。

二、「法華經」書写について

奈良時代の写經の特色の一つとして、同一經の多量書写があげられる。法華經について述べるならば、千部法華經の書写が第一にあげられるであろう。

正倉院文書をみると、千部法華經書写の始まりは、天平二十年（七四八）正月となっている。しかし『続日本紀』^③聖武天皇天平二十年七月十八日の条には、

奉爲^{オツクムニ}太上天皇奉^ル写^シ法華經一千部^ヲ。

とあり、千部法華經書写が七月より始まったように記されている。つまり、正倉院文書と『続日本紀』とは、写經開始の「時」を違えているのである。

さて、千部法華經書写の目的・理由は何であったのか。正倉院文書には、この事については記されていないので、これに関しては『続日本紀』の記事より考えることにする。前述のごとく、法華經一千部の書写は、「奉爲太上天皇」である。太上天皇とは聖武天皇の伯母元正女帝のことであり、この太上天皇に關し、『続日本紀』^①天平十九年十二月十四日の条に、

乙卯^{上四}。勅^{スラフ}。頃者^{コト}。太上天皇。枕席不^ル安^{カラ}。稍^{タリ}經^ニ。弦朔^ヲ。醫藥療治。未^レ見^タ効驗^ヲ。

とあり、天平二十年四月二十一日の条には、

夏^{庚子朔廿一}四月庚申。太上天皇崩^ス於^ニ寢殿^ニ。春秋六十有九。

とある。次に天平二十年（七四八）における太上天皇に関するその他の記事を示すと次のようになる。

丙寅^{廿七}。當^ル初^ニ七^ニ。於^ニ飛鳥寺^ニ誦^ス經^ヲ。自^レ是^ノ之後。每^ニ至^ル七^日。於^ニ京下寺^ニ誦^ス經^ヲ焉。

丁卯^{廿八}。是^レ日火葬^ス太上天皇^ヲ於^ニ佐保山陵^ニ。

五月^{庚寅}丁丑。勅^{シテ}令^{シテ}天下^ノ諸國^ニ奉^テ爲^ス太上天皇^ノ。每^ニ至^ル七^日。國司自親潔齋^シ。皆請^フ諸寺^ノ僧尼^ヲ。聚^メ集^メ於^テ一寺^ニ。敬礼^{シテ}誦^ス經^ヲ。

これらの後、七月の「奉写法華經一千部」の記事に続くのである。

『統日本紀』に基づき、以上の流れをまとめてみると、

一、天平十九年十二月

この頃、太上天皇、枕席安からず

二、天平二十年四月二十一日

太上天皇、六十九歳で薨す

三、天平二十年七月十八日

奈良時代における法華經書写についての一考察

奈良時代における法華經書写についての一考察

太上天皇の為に、法華經一千部を写し奉る

となる。『続日本紀』に従ってみるならば、千部法華經書写は、太上天皇の追善菩提のためであったといえよう。しかし、正倉院文書にあるように、「正月より書写が始まった」ということをみるならば、千部法華經書写の目的に相違が生じてこよう。つまり、天平二十年（七四八）正月の時点においては、太上天皇は「枕席安からず」であったものの存命中である。とすれば、病氣平癒を祈念しての写経が、正月より始められたと考えられるのである。しかし、千部法華經書写の途中で太上天皇は薨じ（天平二十年四月二十一日）、病氣平癒祈念のための写経から、追善菩提のための写経に切りかえられたものと推測される。そして、天平二十年正月に始められた千部法華經書写は、天平勝宝三年（七五一）六月以前に完了したことが、正倉院文書によって知られており、法華經一千部八千卷を書写するのに三年あまりの歳月を必要としたのである。

ではこの大事業を成しとげるのに、どれ程の費用がかかったのであろうか。これを考えるために、法華經一部八卷を書写するための費用を、正倉院文書の中より見ることにする。

応奉写法華經一部 可用析錢并食米等事

合錢二貫六百十七文

紙百八十張 直錢五百卅文

筆二箇 直錢一百文

墨一迂 直五十文

黄蘗一連 直錢十五文

椽^⑦二升 直錢四文

布施錢一貫九百八文

食米^⑤六斗二升五合

五斗經師廿人拵

七升五合裝潢三人拵

五升校生二人拵

酢二人一合 塩^{①②}別人五合

未醬々各別一合

海藻雜菜等

天平十九年五月七日

これは、『大日本古文書』第九、一九一頁にみられる例である。写経のための必要具・布施錢・食料などが示されており、しめて二貫六百十七文ということである。千部書写となれば、この千倍ということになる。

次に千部法華經書写の歴史を、『大日本古文書』よりみることにする（巻／頁）。

天平二十年正月十一日—三月二十九日

合奉写法花經四八部^④三五二卷^④（3／70）

奈良時代における法華經書写についての一考察

奈良時代における法華經書写についての一考察

天平二十年十月十七日以前

合奉写法花經九部（3／123）

天平二十年十月十七日―十一月十三日

奉写法花經合三〇部二四〇卷（3／130）

天平二十年十一月十三日―十二月十五日

奉写法花經四八部三八四卷（3／137）

天平二十年十二月十五日―天平二十一年二月二十七日

合奉写法花經五五部四四〇卷（3／202）

天平二十一年二月二十七日―三月二十九日

合奉写法花經六〇部四八〇卷（3／208）

天平二十一年三月二十九日―天平感応元年六月三十日

合奉写法花經一二三部九八四卷（3／264）

天平感応元年七月一日―天平勝宝元年八月三十日
合奉写法花経五六部四四八卷（3／274）

天平勝宝元年九月一日―十二月十四日
奉写法花経一四五部一二六〇卷（3／336）

天平勝宝二年正月十五日―四月四日
合奉写法花経一四〇部一二二〇卷（11／241）

天平勝宝二年五月一日―七月二十九日
合奉写法花経七二部五七六卷（11／337）

天平勝宝二年八月一日―十二月十五日
合奉写法花経一一九部九五二卷（11／430）

天平勝宝三年正月
奉写法花経一六部一二八卷（11／539）

奈良時代における法華経書写についての一考察

奈良時代における法華經書写についての一考察

天平勝宝三年二月

奉写法花經三〇部四部七六二四〇卷 (11 / 534)

天平勝宝三年三月

奉写法花經七六三部一四五一〇四卷 (11 / 529)

天平勝宝三年四月

奉写法花經二六部二二四卷 (11 / 523)

天平勝宝三年五月

奉写法花經六九卷 (11 / 515)

天平勝宝三年六月付

合奉写法花經一〇〇部八〇〇卷 (12 / 22)

□前、起去天平廿年正月十一日、盡天平勝宝□
一、写二千部既訖、但九百部者、先□者、今時
応賜、仍具状、以解、

天平勝宝三年六月

以上が、『大日本古文書』に書写期間・部数・巻数が記されているものである。
次に⁹⁾経師・¹⁰⁾校生・装潢を加えた千部法華経書写の歴史を示す。

天 平 20 年 (748)												年号
12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	月
15	13	17							29		11	日
48 30 9									(a)48			部数
384 240 (b)72									352			巻数
3/137 3/130 3/123									3/70			大日本 古文書
40 30 9									18			経師 布
8 7									6			校生 施人数
7 9									4			装潢 数
七月十八日、奉写法華経一千部（『続日本紀』） 四月二十一日、太上天皇崩御（『続日本紀』）												記

奈良時代における法華経書写についての一考察

天平勝宝 2年(750)			天平勝宝元年(749)						勝宝元年 感応元年	天平感応 元年(749)		天平21年(749)			
3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
		15	14			1	30	1	30			29	27		
140			145			56		123		60	55				
1120			1160			448		984		480	440				
140			3 / 336			3 / 274		3 / 264		3 / 208	3 / 202				
74			60			44		60		43	42				
13			13			12		11		12	6				
13			7			9		8		3	3				

奈良時代における法華經書写についての一考察

奈良時代における法華經書写についての一考察

天平勝宝3年(751)						天平勝宝2年(750)								
6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	4
						15				1	29		1	4
(f) 100	(e) 8	26	(d) 13	(c) 30	16	119			72			140		
800	69	214	104	240	128	952			576			1120		
12 / 22	11 / 515	11 / 523	11 / 529	11 / 534	11 / 539	11/430			11/337			11 / 241		
51	※ 188	※ 601	※ 342	※ 795	※ 482	65			55			74		
12	※ 34	※ 100	※ 51	※ 127	※ 86	13			14			13		
8	※ 24	※ 33	※ 52	※ 125	※ 79	8			9			8		

天平二十年四月より同年十月十七日までの間では、千部法華經書写の記録は、「十月十七日以前に九部が書写された」という一例にとどまり、天平二十年四月より十月までの約七ヶ月間は、千部法華經書写の空白の時代といえる。書写されたにもかかわらず、その記録が消えているだけなのか、あるいは書写そのものがなされなかったのか。書写の記録より検討してみたい。

表中(a)～(f)について注釈する。

- (a) 『大日本古文書』には、「冊八部三百五十二卷」とある。石田茂作氏は、『写經より見たる奈良朝仏教の研究』の中においては、部数は示さず三三四卷としている。
- (b) 『大日本古文書』においては、七二卷は示されず、ここでは書写部数九より算出。書写期間は不明であり、十月十七日以前に書写完了したことが示される。
- (c) 『大日本古文書』には、「冊部二百冊卷」とある。三四部、二七八卷
- (d) 『大日本古文書』には、「十八部部一百四十五卷」とある。一八部、一四五卷
- (e) 『大日本古文書』においては、八部は示されず、書写卷数六九より算出。
- (f) (f)については後述する。

表に示された部数・卷数に注目すれば、天平二十年一月十一日より天平勝宝三年五月までの間に、九九八部・七九六三卷が書写されたことになる。この数に前記した(a)・(c)・(d)に示される部数・卷数を加えてみると、一〇〇三部・八〇二四卷という数が出され、數量としては法華經千部を満たすものとなる。そうすれば、天平二十年四月より十月十七日まで書写された法華經は、九部だけにとどまるのであろうか。もしそうであるならば、いかなる理由による

のであろうか。

一月十一日より千部法華經書写が始まり、三月二十九日までに四八(四四)部・三五二(三三四)巻が、第一階段として書写されている。この三ヶ月間は、書写活動が順調に進んでいたと考えられる。しかし、順調に進んでいた書写活動は、四月より約七ヶ月間、不活発なものとなった。そして、十月十七日より再び書写活動は、活発なものとなった。となれば、その七ヶ月間において、一時的な活動中断がなされたものと考えられる。

『統日本紀』によれば、天平二十年四月二十一日に太上天皇(元正天皇)が崩御されている。この月(四月)は、書写活動が不活発となった最初の月と一致する。これからすれば、太上天皇の崩御が、千部法華經書写活動に影響を与えたものと考えられる。活動の中断は、一時的なものであり、その中断は、喪に服するためのものであったといえよう。

十月十七日以前に書写された九部について考えると、それは四月一日より天皇崩御の日である四月二十一日(『統日本紀』)、もしくは四月二十日までの間に書写されたものであろう。そして、九部書写完了より十月十六日までが、喪に服した期間となつたのであろう。

さて表中の(f)であるが、天平勝宝三年一月より五月までの書写部数からみて、六月の一ヶ月間だけで一〇〇部・八〇〇巻を書写することは不可能であろう。表中※(天平勝宝三年一月―五月)に示されるのは、各月の経師・校生・装演の数であるが、これらは各月の延べ人数であり、これらの経師・校生・装演に対する布施の記録がないことからすると、六月に示された経師・校生・装演が実質人数であり、一月より六月までの総計が、一〇〇部・八〇〇巻として六月付の記録としてのつたのであろう。

奈良時代における法華経書写についての一考察

三、寿量品書写について

寿量品の多量書写については、『大日本古文書』巻十一、二二九頁の「六月食口」よりその記録がみられる。「寿量品上帳」(11/264)には「天平勝宝二年六月廿日始上」とあり、「写書所解」(3/521)には「以前、奉_レ写_二法花経寿量品四千卷_一已訖、仍布施之物願注、所_レ請如_レ前、以解、天平勝宝三年八月十二日」とある。これによって寿量品四千卷の多量書写が、勝宝二年六月二十日より天平勝宝三年八月十二日までの約十五ヶ月間になされたことがわかる。次に寿量品書写の歴史を、『大日本古文書』によって示す。

天平勝宝二年六月二十日(11/264)
始上

天平勝宝二年六月食口(11/229)

四六人写寿量品

天平勝宝二年七月食口(11/230)

五六八人写寿量品

天平勝宝二年八月食口(11/232)

一五八人写寿量品

天平勝宝二年九月食口 (11 / 233)

二八七人写寿量品

天平勝宝二年十月食口 (11 / 233)

二四六人写寿量品

天平勝宝二年十一月食口 (11 / 234)

四八三人写寿量品

天平勝宝三年正月行事事 (11 / 539)

合奉写寿量品三〇五卷

経師一五一人

天平勝宝三年二月行事事 (11 / 534)

合奉写寿量品五八〇卷

経師三八八人

天平勝宝三年三月行事事 (11 / 529)

奈良時代における法華経書写についての一考察

奈良時代における法華經書写についての一考察

合奉写寿量品五三一巻

經師四〇〇人

天平勝宝三年四月行事事 (11/523)

合奉写寿量品一四巻

經師三二人

天平勝宝三年五月告朔事 (11/515)

合奉写寿量品一〇巻

經師五人

天平勝宝三年六月食口 (11/514)

八一人写寿量品

天平勝宝三年八月十二日付 (3/515)

合奉写寿量品二〇五九巻

經師四五人

以前、奉写法華經寿量品四千巻已訖、八月十二日

天平勝宝 2 年 (750)							年号
12	11	10	9	8	7	6	月
							日
							卷数
	11 / 234	11 / 233	11 / 233	11 / 232	11 / 230	11 / 229	大日本 古文書
	(483)	(246)	(287)	(158)	(568)	(46)	經 師 (書生)
	100	57	66	26	108		校 生
	23	14	19	31	45	15	装 潢
				9.1	8.1	6.29	古文書 の日付
天平勝宝 3 年 (751)							
8	7	6	5	4	3	2	1
	30- $\frac{6}{21}$	20-1		29-1	29-1	30-1	
2059			10	14	531	580	305
3 / 515		11 / 514	11 / 515	11 / 523	11 / 529	11 / 534	11 / 539
45		(81)	5	32	400	388	151
5		10		11	60	58	40
5	11	3	1	30	21	31	20
8.12		6.21	6.1	5.1	4.5	4.5	

次に、校生・装潢を加えた寿量品書写の歴史を示す。

奈良時代における法華經書写についての一考察

天平勝宝三年八月に示される二〇五九卷について考えると、八月の十二日間で書写完了させることは、他の月々の書写巻数と比較してみると、不可能なことと思われる。天平勝宝三年一月より五月までの書写巻数は、一四四〇巻である。一月より八月までの総関数を二〇五九巻とすれば、六月より八月十二日までに、月平均約二六〇巻の割合で書写されていたことになり、その総数が六一九巻である。天平勝宝三年度分として、二〇五九巻が書写されていれば、「四千巻已訖」ということからして、天平勝宝二年六月より十二月までの間に、一九四二巻が書写されていることになる。月平均約二七七巻の割合で書写されることは、天平勝宝三年の記録と比較してみても可能であろう。

では、何のために四千巻もの寿量品を書写する必要があったのか。『大日本古文書』巻二五、二〇四頁に、
奉_レ請_二法花經如来寿(量)品一千卷_一

右、被_二大納言藤原卿宣_三云、爲_レ奉_レ読_二件經_一、火急奉_レ請者、乞察此旨、今急奉_レ請

五月三日使大伴菟万呂

とあり、寿量品一千巻の貸し出しを行なっており、このような件のために寿量品を書写し、たくわえていたものと考えられる。

四、結 び

奈良の都は、文化的な面では仏教により成りたっていた。南都六宗が国家仏教として大きな力もち、東大寺・興福寺・元興寺・大安寺・薬師寺・西大寺・法隆寺は、南都の七大寺として、奈良仏教寺院の中心的役割を果たしていた。以上の中においては、法華經を依經とするところはないが、奈良時代において法華經は、重要經典の一つとしての地位を確立していた。千部法華經書写という大事業がそれであった。法華經は、国家事業において不可欠な經典で

あったと言える。

千部法華經書写は、官的な写經事業であり、写經事業そのものが、光明皇后・称徳（孝謙）天皇の仏教尊重と結びついていったものの、奈良時代の官営写經事業は、この二人をぬかしては、語ることはできない。権力者と結びついた写經所内で書写作業がなされたといっても、法華經は、千部法華經書写を含め、二千部以上が奈良時代に書写されたことが『大日本古文书』により知られるのである。

註

- (1) 『国史大系』1下三三二頁
- (2) 『国史大系』1下二五一頁
- (3) 『国史大系』2一九六頁
- (4) 『国史大系』2一九四頁
- (5) 『国史大系』2一九六頁
- (6) 黄蘗は「きはだ」といい、芸香料に属する灌木のこと。この樹皮と明礬とを煎じて、その汁をもって染めたものらしく、腐蝕を防ぐ働きがある。
- (7) 椽は「とち」のことで、椽子をくださいて、その汁をもって染めたらしく、黄蘗と同じく腐食を防ぐ。
- (8) 東京大学史料編纂所編
- (9) 写經所においては、經師又は經生といい、写疏所では疏師・疏生と呼ぶ。両者に共通しては書師・書生と名づけており、經所において最も主なる要素をなす。

奈良時代における法華經書写についての一考察

奈良時代における法華経書写についての一考察

(10) 校生すること。

(11) 経師によって写経され、校生に吟味された経典は、次に表装を施されて、経巻として使用される。この「経師屋」を古文書では装瀆と名づけている。

参考資料

『写経より見たる奈良朝仏教の研究』（東洋文庫・石田茂作）

『奈良朝仏教史の研究』（吉川弘文館・井上薫）

『日本古文学論集』3（日本古文学学会編）

『大日本古文学』

『国史大系』